シリーズ
かほく市の文化財 No.41

遺跡 編　かほく市内の城跡（２）

No.４０に引き続き、かほく市内に残る城跡、とりわけ「多田城跡」に焦点を当ててついて紹介します。

多田城跡は、かほく市の多田にある山城で、丘陵の頂部に主郭とみられる平坦面の一部や主郭の入口（平虎口）や土塁の一部が現在でも確認できます。また書物をみると、『越登賀三州誌』「故墟考　巻之四」、『石川県河北郡誌』「宇ノ気村城山」に多田城の記述がみられます。築城時期は中世ではないかとされていますが、正確な時期は不明であり、築城者はその当時の地元の有力者であったのではないかと考えられています。

また、多田城周辺の中世の遺跡をみてみると、能瀬川流域で一向一揆の中心的な役割をしていたといわれる「英田（あがた）広済寺（こうさいじ）跡（あと）」や、多田城の北西には１６世紀後半に築城されたといわれる「上山田城跡」などがあります。多田城が存在していた正確な時期が不明であるため、難しいところではありますが、一向一揆との関連も視野に入れて多田城をみていくと、新たな発見があるのかもしれません。

３月は、草木の茂りが薄く、山城探索に向いた季節といわれています。かほく市内の山城は、山深い場所にあるなど危険なため探索できませんが、宝達志水町の末森城など整備された近隣の有名な山城を巡ってみてはいかがでしょうか？

写真１　主郭の入り口（平虎口）（南東から）

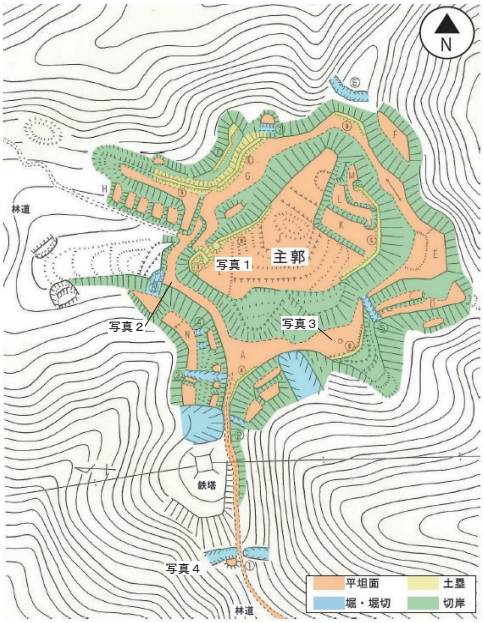
写真２　尾根を切った様子　（西から）

写真３　平坦面と土塁　（南東から）

写真４　堀切　（北西から）

多田城跡の現地写真

自然地形を利用しつつ、平坦面を作った様子や掘り込みが行われたことなどが伺える。なお、これらは落葉など堆積により当時よりも埋没している。



多田城跡の縄張図

（石川県中世城館調査報告書Ⅰより　作成：宮本哲郎氏）